

私の履歴書 目次

横浜から始まる私の記憶	1
日清戦争の勃発と父の死	2
幼年期の一時、福澤諭吉邸に住む	3
幼稚舎でなく市立小学校へ	4
生涯を決した塾への編入	5
上下差別のない塾の学風	6
海軍をあきらめ大学部へ進む	7
教師に反抗的的作文を書く	8
大学に残ることを決意	9
『三田文学』と永井荷風	10
独仏英三国に四年間の留学	11
「社会主義」に関心を持つ	12
ロンドンで思想書専門店に通う	13
一流教授を擁したベルリン大学	14
ドイツ留学中に第一次大戦勃発	15
日本人は高みの見物	16
ビッグウ、ケインズを聴講	17
「花のパリ」の片鱗もなし	18
帰朝後、塾の教授となる	19
胸を病み一年半ほどを読書で過ごす	20
マルクス批判者となる	21
満支に遊び橋樑を知る	22
上海で共産党の資料入手	23
塾長に選ばれる	24
日吉台に予科校舎設立	25
増築の二階で「木曜会」	26
学内全教授の論文読破	27
焼夷弾で重傷を負う	28
塾長を退き文筆生活にはいる	29
池田成彬さんの想い出	30

『日本経済新聞』の同名の欄に昭和三十七年元旦から正月一杯連載され、著者歿後の昭和四十一年八月、日本経済新聞社から刊行された。既刊の本から「師弟」「姉弟」「テニスと私」「わが食物」の四篇を合せ収めているが、これはもとの単行本で本全集に収められる（このうち「わが食物」は本巻二七三頁以下に収められている）。本篇の人名のよみ方は富田正文刊行委員による。なお、『私の履歴書』には巻末に同氏の「戦後の小泉先生」という解説がつけられている。

横浜から始まる私の記憶

私はこの元日（昭和三十七年）に七十三歳七カ月、即ち明治二十一年（一八八八年）五月四日、芝三田の四丁目、即ち慶應義塾の丘の西南の麓の家で生れたものです。その家はもう久しい以前に取りこわされて、あとはあの辺の消防分署になっていますが、私がこの頃も慶應に用事があってあの辺を車で通ると、消防士が自動車の掃除をしたり、蒸気ポンプのホオスを乾したりしているのを見ることがあります。

私の父は小泉信吉のぶきちといい、明治十三年横浜正金銀行（東京銀行の前身）の創立に参加したり、次いで大蔵省の官吏（主税官）となったり、更に慶應義塾の塾長に選ばれたりしたのですが、私の生れたときはすでに慶應義塾の塾長でありました。母は林姓で、千賀ちかといい、父母ともに紀州和歌山藩の藩士の子ですが、父は下級士族の出であるのに対し、母の生家は御殿医で、食禄二百五十石というのですから、父よりは母の方が大分上流の家の娘だったわけです。この父母の間に男子二人、女子三人が生れたのですが、私の兄は生後間もなく死んだので、私は姉一人、後に生れた妹二人、つまり女の間に成長することになりました。このことは私の性格や経歴に何かの影響を与えているかも知れません。

父は間もなく慶應義塾をやめました。このことは一度書いたことがありますが、父が塾のことで、無二の恩師である福澤諭吉先生と衝突したのです。これは父の生涯で最も心苦しい事件だった訳ですが、父の心を——また福澤先生の心を——推察し得たのは、私が自ら老人となった遙かに後年のことで、久しい間私は何とも思っていないませんでした。

慶應をやめた父は日本銀行に入り、有名な総裁の川田小一郎氏の知遇を得て、今でいうそのブレイン・トラストの一人となりましたが、間もなく日本銀行から派遣されたような形で、横浜正金銀行——十年前に自分がその創立に参加した正金銀行——の支配人になりました。そうして家を横浜に移しました。その時私は三歳の小児だったわけであるが、私の記憶はこの横浜から始まるのです。

その頃の横浜駅は、今の桜木町駅の辺にありました。石造の四角な建物で、その頃の東京の新橋駅と同じ形のものでした。停車場を出ると前に広場、その広場を限る掘割に架せられた橋が、今と同様、右は大江橋、左は弁天橋ですが、その橋を渡らずに左の方へ海沿いに行くと、神奈川の方面への道路が通じていた。今はドックとなり、町名も入船町となっているようだが、日清戦争前のその頃は、この辺もやはり桜木町といってその一丁目一番地というのが私たちの家でした。

それは日本郵船会社の支店長の役宅を父のために正金銀行で借り受けたのだということ、洋間もあり、使用人の長屋もあり、その頃としては、まず宏壮といえるものであったと思います。道路をへだてて、門の前の石垣には、まだ築港されない以前の横浜港の波が打ち、夕方になると、夕河岸と称して、漁船がそこに集まって来て魚の市が立ちました。私の家からも女中がザルをさげて駆け出して往つたのを見て憶えています。右の方には、本牧の岬につづく山、左には、夜は水に映る神奈川の灯が見えた。小児の私も、いつか「ジンプウ」という名を知りました。有名な神風楼というものが、その頃まだ営業していたのでありましたか。

小児の私の記憶は、この家で始まる。何時か或るドイツ人の書いた本を読んで、自分の洗礼式の光景を見て憶えていると知っているのに驚いたことがあります。私自身の場合は、それよりはずっと後れて、この家で始まるのです。

*「師弟—福澤先生と私の父—」（『文藝春秋』昭和三十四年三月号）『この一年』に収める。

日清戦争の勃発と父の死

私は東京に生れて、ずっと東京で暮らしましたから、故郷というものが無い。強いていえば初めて物心のついたこの横浜がそれで、後年に至っても多少望郷の情があり、用もないのに横浜に来て、海岸を散歩し、ホテル・ニューグランドで茶を飲んで帰るといようなことをよくしました。

明治二十七年、数え年七つとき私は小学校に入れられました。その頃すでに義務教育の制は実施されていましたが、就学年齢の定めなどは必ずしも厳格ではなく、二歳年上の私の姉は八歳で漸く通学し始めたのですが、私は満六歳に達しない中に入学させられてしまった。それは私が内でわが儘にふるまうので、早く学校へ出してしまった方が好いという父母の考えによるものであったと、後になつてきかされました。けれども、そのお蔭で私は後年慶應を、人より若く卒業することになりました。

入学した学校は横浜小学校といい、その頃横浜の本町にありました。今日桜木町の駅を出ると、目の前の掘割にかかる二つの橋の左の方が弁天橋、それを渡ると本町で、その本町の最初の角を左へ曲つたところに、この学校がありました。桜木町の家からは何ほどの距離でもないから毎日歩いて通つたが、その当時の先生にも同級生についても、ほとんど何の記憶も持っていない。ただ往復の途上でシナ人に会うのがこわかった。その時分横浜には外人居留地があり、南京町というものもあり、南京町以外にも市中到るところにべんぼつ辮髪、シナ服のシナ人を見たが、誰れいとうとなく、そのシナ人は子供をさらつて行つて売るといふ噂がたつたので、私たちは怖れたのでした。

ところが、私が入学したその年、そのシナと日本の戦争が起り、敵愾心てきがいしんが燃え立ちました。それは明治二十七年の夏のことですが、その前年に、陸軍少佐福島安正が、ベルリンからの帰り、単独シベリアを騎馬で横断するという冒険を敢行して成功したことが、日本国民の士気を振り立たせました。

見よや見よ。福島中佐の絶代偉業。日本帝国軍人の、重き名誉を一身に、担うて起ちし安正が……

という歌が流行し、小児の私もその口真似をした。

日清開戦はその翌年のことでありましたが、開戦すると、すぐまた愛国的な流行歌が行われた（漱石の「坊っちゃん」の中の宴会場で、野だいこなる人物がこれを歌う * 吉田による巻末注参照）。

日清談判破裂して、品川乗り出す吾妻艦。西郷死んだも誰がため、大久保死するも誰がため。遺恨重なるチャンチャン坊主。云々。

私はまたその真似をしてそれを歌いました。ところが或る日そのシナ人が一人、私の家へ駆け込んできました。それは正金銀行に、銀貨鑑定のため雇われていたペンサン（どういう字を宛てるのか不知）という人物ですが、迫害を受けて身の危険を感じ、銀行の支配人たる父の許へ急を訴えたのでした。父は早速命じて銀行から人を出し、また警察にも連絡して保護の途を講じさせたということで、ペンサンの身は安全になりました。数日の後、彼はその礼に来ました。古い清朝時代の礼法でしょう。玄関のタタキの上に跪ずき、辮髪べんぱつの頭を地に伏せ、双腕をゆるやかなシナ服の袖口の中に組んで、それを頭上に捧げることを幾度か繰り返すのを、子供の私は驚いてながめていました。

それが夏のこと、冬の初めには父は、多分盲腸炎の悪化でしょう、腹膜炎にわを起して、遽かに四十歳で死にましたが、その棺の周囲に並べられた供物の中にペンサンからのものがありました。油で揚げた食物、色のある紙に大きな字を書いたもの、同じく彩色した蠟燭ろうそくに火が燃えていたように思

幼年期の一時、福澤諭吉邸に住む

前に記したように、私たちは「怨みかさなる云々」という愛国流行歌を歌い、父もまた戦局をうれいて、その年の十一月二十一日、当ても難攻不落と称せられた旅順の要塞が、わが軍の僅か一日の攻撃で陥落したのを殊に喜んだのを、小児の私も知っていました。その愛国者たる父が、敵国人に保護を加え、その感謝を受けたのです。今思えば実際、当時横浜でシナ人に保護の手をさしのべるのは、多少の俠気を要したと察しられます。

しかし小児の頭は意外に大人びているものです。六歳の私は父のしたことの意味を解し、それを正しいことだと嬉しく思いました。或いは誰れかに聞かされたのであったかも知れない。

父を失ったのは数え年七歳の年の暮れでした。父が死ぬと、母はすぐ一家をまとめて、横浜から東京の三田へ、いわば父の恩師福澤先生の膝下へ引き揚げて、三田の四丁目、即ちもと私が生れた家の隣りの地面へ、手頃の家を新築して、そこに住むことになりました。それは前にも記したように、慶應義塾の丘の西南端の麓に当る地で、表ては三田から白金や目黒の方へ通ずる道路に面し、裏木戸を開けば、そこはすでに慶應義塾の構内でした。私はこの家に母と祖母と姉と妹二人とともに住み、姉妹はこの家から他家へ嫁ぎ、私はこの家で慶應義塾を卒業しました。

それはずっと後年のことですが、記しておかなければならないのは、この家が新築される前、私たちは一年足らず福澤先生のお世話になり、その邸内の一棟ひとつねにしばらく住んでいたことです。福澤邸は昭和二十年五月の空襲で焼け落ちて跡形なくなりましたが、もとは慶應の丘の東南端隅を占める四百坪約千三百二十平方メートルあまりの大邸宅であった。その本邸と陸橋のような廊下つづきの一棟があり、そこへ私たちは一時引き取られた次第です。だから、私は福澤先生と同じ屋根の下に住んだことがある、といつては少々言い過ぎるかも知れないが、先生と同じ屋根つづきの下に住んだこと、言つて言えないことはない。いま私の履歴書を書くとする、私にとつては父の師であり、私自身の師でもあり、思想的に生活的に私の一生に大きい影響を与えた福澤というこの一人の人のことを、どうしても語らなくてはなりません。

そんなら私は何時初めて福澤先生を見たかという、その記憶はハッキリしない。横浜で父が死ぬ二日前、即ち明治二十七年十二月六日、先生は東京から父の見舞いに来て、私の家で筆をとつて、父の病状を親友の日原昌造ひのはらしょうぞうという人に報知し「横浜小泉宅にて諭吉」と署名した手紙が、福澤書簡集に収められている。それをみれば、先生はその日私の家の応接間か日本座敷か、何処かで筆を執り、子供の私は、同じ家の何処かにいたのでなければならぬ筈であるが、私には何の覚えもない。私の先生を見た記憶は、この福澤邸内に住むようになった時以来のものです。

しかし、子供の目に英雄はない。子供の私の目に、先生は別に偉人とも大先生とも映じませんでした。当時は日清戦争直後のことで、子供にとつての英雄は当然陸海軍人であった。もし子供で陸海軍の中将や少将よりも（当時まだ大将はなかったと思う）福澤先生の方が偉大であるというものがあつたとするれば、それはよほどヒネコビた早熟の児であつたろう。私はごく普通の子供として、やはり勲章を胸に連らねた陸海将官の方に注意をひかれていたというのが事実であります。

幼稚舎でなく市立小学校へ

しかし、同じ邸内にいたのですから、先生の様々の姿は見ています。その年六十三歳であった先生が、毎朝「ウン、ウン」と声をかけて米を搗く、そのかけ声も臼の響きも、毎日ききました。先生が庭上で得意の居合を抜き、頭上に白刃をふり回すことをくり返すのも見たことがある。

夏の或る日、先生と愛孫の七歳の中村壯吉（先生の長女の二男、父を亡う）と八歳の私とは、庭の芝生の上にしやがんでいました（先生はゆかたを着ていたと思う）。私の向う脛を、尻に縞のある藪蚊が刺している。どうして捕えようかと思っていると、先生の大きな掌が私の脛をたたいた。血が散った。「信さん、それ」と、先生は蚊をつまんで私に見せた。なるほど、蚊はこうして捕るものかと、私は思った。

このように先生の身近かにおりながら、私の先生に関する記憶はこのような鎖末なことばかりです。いかに八歳の小児とはいいながら、欲のない子供というのは仕方のないものだ。六十五年後の今日、私は当時を回想して、遺憾というか、もどかしいというか、あれほどの歴史的人物と同じ屋敷内に、一年近くも住みながら、何一つろくなことも観察しなかったとは何たることか、という腹立たしさを、自分自身に対して感じます。その時、せめて自分が二十の青年であったならと、その後よく思いました。

その先生は明治三十四年二月、二度目の脳溢血で亡くなりました。その時、私は数えて十四の少年でしたが、そういう年頃であったのか、先生に対しては、屋根つづきの家に住んでいたときのような親しみは感ぜず、葬式の日にも、母と姉とは謹んで葬列を見送りに出たのに、私は、風でも引いたのであったか、不機嫌な気分でした。

ここで学校のことを語ると、私は当然慶應の幼稚舎へ入らなければならぬ家の息子でありながら、幼稚舎には入らないで、三田台町の市立御田小学校というのに入れられた。幼稚舎は資沢だとしても、母が考えたのであったか、否か。到頭きいて見たこともありません。三田には、三田通りのすぐ横に南海小学校というのがあって、この方が近くて通学も楽であったのに、聖坂上の台町の御田小学校に入れられたのは、この学校の評判が特によかったものか、どうか。後に水上瀧太郎となった阿部章藏がやはり、父泰藏は慶應の元老の一人でありながら、幼稚舎には行かずこの御田学校に入っていました。

大体の校風は、幾分山の手風で、前記の南海小学校は町家の子供が多かったのに対し、御田学校の方は——無論町家の子も多くいたが——軍人、官吏、また頭取とか社長とかいわれる人々の子供が多かったようです。前記の阿部が保険会社社長の息子であった外、横浜正金銀行頭取園田孝吉の息子の忠雄、黄海々戦（日清戦争の）で勇名を走せた海軍少将坪井航三の子の顯三郎（この顯三郎は後に原姓を冒し、累進して海軍中将となり、今も健在でこんどの戦争でも、俺れの参加した海戦は一度も負けていないと豪語している）、山本權兵衛（このひょうえい）の弟で、たしか当時海軍少佐であった太田盛實の子操、産業振興のために功績のあった元農商務省官吏前田正名の子三介、男爵の家の子鍋島陸郎（くがお）等が同級生でした。吉井勇は一級上でしたが、その父がやはり海軍少佐伯爵吉井幸藏であり、更に当時海軍省軍務局長で、權兵衛大臣の称のあった山本權兵衛一家の子女も、皆なこの学校に学んだと記憶します。

考えて見ると、それ等の級友たちは、皆な明治の変革後に成立した新支配層に属する家の子弟であり、その父等は皆な地方から出てやや位置を得て、東京と改称された江戸の市民の上に臨むという風があり、或る者は抱え車を置き、更に或る者は馬車で出入りするという身分でした。しかも気づいて見れば、前記の私の同窓生の中でも、園田、太田、前田、吉井、山本はみな薩摩出身者であったことは、歴史的に何事かの意味を持っていると思います。そうしてそこにこの学校の下町の学校とちがう一種の風があると思われる。

今顧みて異様に思われるのは、授業料に等級のあったことです。御田学校では尋常科のそれが月額七十銭、五十銭、三十銭。高等科のそれが一円、七十銭、五十銭で、父兄の都合で自由にいずれかを択ぶようになっていた。私の母はその中級のを択んだが、阿部や園田や坪井は無論一級授業料を納めたのであつたらう。今考えると、随分弊害の起り易い制度だが、当時学童らが一級授業料を納めるとを誇り、三級を納めることを肩身せまく思うというようなことはなかったと思う。少なくとも私自身は、人が七十銭納めようが、三十銭納めようが全く無頓着でした。

ただ、土族平民ということは時々いわれました。当時はまだ何かにつけて書類に族籍を記したものでしたが、前記の級友たちは皆な士族であつて、いくらかそれを誇る風があつたかと思われる。更に学校の公立私立ということをよくいました。前記の通り、我等の母校は東京市立であつたが、明治三十年前後の当時、まだ私立の小学校、代用小学校というものが処々にあり、それに対して吾々は、公立学校は何か一段高いもののように思い、その生徒であることを得意とする風がありました。これは明治日本の官尊民卑思想の一つの現われで今ものこっていますが、この点、私は後に慶應義塾に入つて、全く洗礼を受け直すことになりました。

私が慶應に入つたのは明治三十五年、数え年十五の一月でした。その入りようも変則的なものであつた。私は御田学校では、出来の好い方でしたが、当時出来の好い子供は、みな高等科の二年を終えると、中学の入試を受けて去つて行く。無論人々の第一志望はいわゆる一中即ち東京府第一中学校であつたが（芝公園にあつた正則中学も評判が好く、園田などはそっちへ行きました）、私は今から考えると可解至極にも、何の手続きもせず、そのままズルズル高等四年まで来てしまいました。それを見かねて、私の従兄でその頃慶應大学部の上級にいたものが、時の塾長の鎌田榮吉氏に懇願（多分）してくれた結果、普通部（中学部）二年級の第三学期に無試験編入を許されることになり、入れてくれるなら有り難いとばかり、そのまま又クヌク慶應の生徒になつたのです。

塾長がどういふ理由を認められたか知りませんが、いずれは慶應に縁故のある家の忤だから、という酌量に相違なかつたことは明らかで、今では許されない恩恵です。

今になって顧みると、私の生涯のコオスはこの慶應入学できまつてしまつたようなものです。私はそれから慶應の中学、大学を順当に進級し、卒業し、卒業すると、今でいう経済学の助手に採用され、次いで西洋留学をさせてもらい、帰朝して教授となり、ついで塾長に選ばれ、更に十余年その役を勤めたのち、退いて今日に至つたという次第であるから、この入学のとき私は生涯の岐路に立つたわけです。ところが、そのいずれの道に進むべきかを、私は自分で決しないで、人にきめてもらったようなもので、今日の用語でいえば、主体性の欠乏も甚だしい訳と顧みて自ら苦笑に堪えません。人の一生にはこういうこともあるのでしょうか。

* 当時小学校は尋常科四年、高等科四年であつた。

上下差別のない塾の学風

さて慶應に入つて見ると、御田小学校とはおよそ風がちがう。その時、福澤先生はもう一年前に亡くなつていましたが、先生の形式嫌い、虚礼嫌いの癖が少し利きすぎた形で、少年の目にも行き届かぬと思うことが多かった。

慶應義塾では一時、教師も生徒も和服の着流しで教室に現われたと言ひ伝えられている。流石に私たちの頃はそれほどではなかったが、制服などはまちまちであり、洋服に草履というのは珍しくない風俗でした。私も早速それに従つた。学課目も不整備であつたと思う。英語に重きを置く^おというのは結構だが、中学（旧制）二年や三年の少年に対し、地理や生理や数学に、英語教科書を用いるというのは乱暴でしょう。私なども地理と幾何学とを英文教科書で教えられたが、よく読める訳がないから、随分損していると思います。それに、漢文という課目がない。これは福澤先生の主張に本づき、或いはその意を体して定めたことで、先生は『福翁自伝』の中でも、「いまの開国の時節に古く腐れた漢説が後進少年生の脳中にわだかまつては、とても西洋の文明は国にはいることができないと、あくまでも信じて疑わず云々」といつています。けれども、当時の中学校で慶應ひとり漢文を教えなかつたのは、吾々の読書力、作文力を弱めるものであつたといわなければなりません。

兎に角当時の慶應義塾の学課規定は、文部省の方針に従わず、また些か継つ子になることを得意とするような風がありました。ずっと後年のことですが、私が慶應義塾から西洋留学を命じられてベルリンに往き、ベルリン大学に入学しようと思つて、日本大使館に必要な証明書類を貰いに行くと、若い館員——外交官補か三等書記官——が出てきて、慶應の普通部は正規の^{ギムナジウム}中学でないから証明書は出せない、という。色々陳弁して、そうして二度まで足を運んで、漸く仮証明書を出してもらつて、無事入学しましたが、その若い外交官が、後年の外務大臣重光葵^{ましろ}氏です。ここでも私は一寸損をしかけた次第です。

けれども、他面当時の慶應はたしかに特色のある学校でした。それは学校内にすべて上下の差別がないということです。第一、生徒が先生に向つて「先生」と呼びかけない。だれに向つても「——さん」である。三田の山で「先生」と呼ばれるのは福澤先生ただ一人で、それ以外は塾長でも、教頭でも、その他の故参教員もみな均しく「——さん」と呼ばれていました。

それから上級生が下級生にいばらず、下級生が上級生に少しも遠慮せず、同輩のような口を利いたことを、いつて置きたい。当時は三田の丘の上に中学も大学も同居していましたが、中学二三年の少年が大学卒業間際の上級生のことを「——君」という。私は知名の先輩を故ら^{かたして}に君呼わりするつもりはないが、今でも当時の上級生を、極めて自然に「——君」と呼ぶ。これも古い慶應義塾の一つの風だといつて好いと思います。

兎に角、三田の山では容態ぶつていばるといふことが流行らなかつた。これはたしかに福澤先生の感化でしょう。それからまた、生徒の中に今でいう水平社と遊廓の子が割合多かつたように思う。私の級友の中にもそれがあつた。それは当時の社会で差別的取り扱いを受けたものが、その子弟を自由な福澤先生の塾に托したいというのではなかつたかと思われる。この慶應における在野的非官僚的気風ということについては由来がある。

海軍をあきらめ大学部へ進む

明治十四年の政変といっても、今はもう分る人も少ないことと思われませんが、それは当時、明治政府の中心人物であった大久保利通亡き後において、最も有力で、かつ進歩的であった大隈重信が、突然政府から放逐され、それと同時に政府が明治二十三年を期して国会の開設を約束したという事件です。

後年即ち一九五三年、ソヴィエトロシアにおいてスタアリンの死後数月にして、当時警察権を掌握していた実力者ベリアが突然政府から放逐され、やがて死刑に処せられるという事件が起ったとき、私は明治政府の大隈追放を思い出しました。ただ、ベリアは殺されたが、大隈は命を全うして、進歩党という政党を起こし、また後に早稲田大学となった東京専門学校を創立しました（明治十五年）。

この時、大隈とともに政府の転覆を図ったと風説されたのが福澤諭吉と岩崎彌太郎で、そのため福澤門下で政府にいた者、即ち矢野文雄、犬養毅、尾崎行雄等々は、みな一斉に罷免され、同時に慶應義塾は政府から敵国視されて、塾内の演説会に警察の密偵が入り込むという次第ともなったと、伝えられます。

この事件以来、慶應義塾は政府と縁が切れ、殊に政府や官吏というものを白眼視する、一種の野党的気分が塾を支配したように見受けられる。そんなことは、当時少年の私によく分る筈もなかったが、この一種の気分は吾々にも快よく、福澤先生が授爵の内定を予め辞退したというような風説が誇大に伝えられたりして、世間見ずの生徒の気位を高めるようになったこともあり、自然私を慶應義塾に落ち着かせることになったように思われる。

というのは、慶應の中学に入れてもらったその初めには、私はまだ進んでその大学部を卒業するつもりかどうか、よく考えてはいなかった。それは、私の心の底に、海軍に行きたいという気持ちがあったからである。一体、海洋好き、海軍好き、軍艦好きの少年というものは、何処の国でも珍しくないとありますが、殊に私たちは日清戦争から日露戦争に至る海軍拡張期に、小児から少年に成長したのである上、海軍の方でも色々少年を海軍へ引き着けることに努めたから、少年の私があこがれを抱いたのも不思議はないと思う。

ところが、海軍へ行くにはミッシリ数学をやらなければならぬ。当時の私には、数学はチツトも面白くない。学校の教え方も甚だ不十分であった。しかし、これだけはやって置かなければならぬと思つて、少しばかり努力して、上級に進む間に、やがてクラスではできる方になりました。けれども、普通部（当時の五年制の中学部）を卒業する頃には、もう私は海軍もあきらめ、またその他の何処へも受験せずに、慶應義塾の大学部へ進む気になっていた。それは結局、慶應の空気が私の体に合ったということでしょう。

なおその外——これは人に笑われそうな話だが——当時の私は運動（テニス）に熱中してその選手となり、塾のために働くのは自分の義務だというような気分になっていた。これも慶應に留まった動機の一部をなしているように思う。いかにも軽重を知らない決断のようだが、少年というものは、こんなことをまじめに考えるものなのでしょう。

教師に反抗的作文を書く

前に御田小学校で同級生であった阿部章藏（即ち後の水上瀧太郎）は、後に私の生涯の友となり、その妹が私の妻となったのであるが、その阿部は私より先に小学校を出て往ったが、私が慶應の中学二年に、お情けで編入されて、最初の日登校して見ると、その同じクラスに彼れはいました。

ところが間もなく、彼れはそのクラスから姿を消しました。私は必要最小限の勉強をしてどうやら進級して行ったのに、野球と泉鏡花に熱中した阿部は、その最小限の努力をすることも怠り、到頭私より二年遅れて慶應の大学部を卒業することになったのです。けれども、それで阿部が損をしたとはいえませんが。鏡花を知ったことは、彼れの一生にとつてたしかに大きいプラスであったし、野球に熱中したことも、マイナスにはなっていない。私の場合にも、或る時期運動に熱中したことは、損ではなかったと思います。

いま中学時代の自分を回顧すると、一寸福澤先生に対して反抗的になったことが思い起こされる。

前記の通り、私が慶應の普通部に入ったのは、もう先生の亡くなった翌年でありましたが、勿論塾では先生の感化は事毎にのこっている。教師の中にも、二言目には先生の名を口にする者がある。また生徒の中にも、多少先生を笠に着るといふタイプの者があり、私たちは何か物事を強いられるような感じがして、イヤになってしまった。態々ここに名を挙げる必要もないことだが、私たちが中学五年のときに習った先生に^{すがくおろ}普學應という人があった。この人は後に福澤論吉伝の編纂にも助力し、平生衷心先生に傾倒していたので、決して為めにするところがあつていったのではないと思ふけれども、やはり二言目には「福澤先生アタシは」（福澤先生などは意味）という。相手が十七八の青年だから堪らない。この先生の訓説は生徒を福澤先生の方へ引き着けないで、却つて反撥させる結果となった。私なども「福澤アタシは」をきくと、「またか」と思うようになった。

或るとき、その先生が作文の題に「『福翁自伝』を読んで感あり」というのを出した。読んで、感心した、と書けば間違いないことは分っているが、私はその気にならず、却つて反対のことを書いた。この自叙伝の中には、当時の書生の間にはやった悪戯であるが、料理屋に行つて皿小鉢などをさらつて来て手柄にすること、先生自身も相当それをやったことが書いてある。例えば万延元年、幕府の軍艦威臨丸ではじめてアメリカへ渡ったときにも、出帆前浦賀に上陸してへあとで聞けば遊女屋だったという茶屋に上つて、みなで酒をのんで、その帰りに廊下で目についたうがい茶碗を一つさらつて来たが、暴風雨つづきの航海中、飯を盛って食べるのに誠に調法であつた、ということを先生は語っている。私はそれを掴まえて、人の物を盗むとは、実に先生として遺憾な所業だと書いた。

教師に反抗するのが目的で書いたのであつたが、無論怒るわけには行かなかつたであろう。悪い点をつけられた記憶もない。

大学に残ることを決意

私は父の代から福澤家と親しい家の子であり、また、今日の日本で、福澤諭吉について最も多くを語る人間の一人であると自ら認めています。その私にしてなおティンエエジの頃はこの通りであった。これは一般に道徳教育のやり方についても考えるべきところであると思います。

今日、共産主義国では、青少年に、一様にマルクス・レーニンを崇拜するといわせて、あまり人物批評などをするものを出さないように見受けられるが、随分人間を素直に馴らしたものと思います。なお序でながら、私が福翁自伝全篇を通読したのは、この時が初めてであった。明治三十七年、私は中学五年生で十六歳数カ月、満洲では日露戦争が戦われているときであった。

翌年の一月一日、旅順口要塞は落ち、三月十日、奉天会戦に勝ち、四月に私は大学部に進み、そして五月二十七八日には日本海々戦で敵の大艦隊は「撃滅」されました。

大学部に入ってからの変化は、私が学問を好み、勉強する学生になったことです。何故の変化か、自分にもよくは分らないが、結局そういう年齢が来て、欲が出たというより外はないであろう。ここに福澤先生を引き合いに出すのは僭越ですが、先生も学問発心は晚かったと自伝に語っている。

「……だれだつて本を読むことの好きな子供はない。私ひとり本がきらいということもなかる。天下の子供皆きらいだろう。私ははなはだきらいであったから休んでばかりいて何もしない。漸く四五になってはじめて塾へ通って勉強し始めたが、その代わり進歩は速かった、とある。私の場合、別に進歩は速くもなかったが、大学の五年間（予科二年、政治科本科三年）は兎も角も、勉強家というこ

とで通ったと思う。卒業間ぎわになって、学校へ残って学問をしないか、とすすめられた。直接すすめてくれたのは経済学者の堀江歸一氏、福田徳三氏であったが、その他の教授諸先生も好意を示してくれたのは仕合わせでした。

これより先き、無論私も卒業後の就職のことは考えていた。僅かばかりの父の遺産で学校修業は差支えなく出来たけれども、卒業すれば自活しなければならぬと覚悟していました。それには銀行会社を志願しようか、学校に残らせてもらうかというのが選択だった訳であるが、学校の構内のようなところに成長した私としては、慶應義塾に留まるのが結局一番自然の途だったのだと思われました。それで卒業前の或る日、三田綱町の堀江博士（そのときはまだ学位を授与されていなかったが）の家を訪問して「よろしくお願いします」と言いますと、「結構だ」と博士は迎えてくれました。

その時堀江氏が私を激励してくれた言葉を憶えている。学者になるのは相撲取りになるようなものだ、これが役者だと、家柄の子に役がつくということもあるが、相撲にはそれが無い、相撲は土俵が強くなければ何ともならない、それだけに面白いのだ、というのであった。当時、堀江氏はまだ四十に満たず、著作評論の活動の最もあぶらの乗ったときであったから、これは後輩に対する激励の言葉であるとともに、また氏自身の自信の発露でもあったかと、今思い起こされる。

これは明治四十三年、私が二十二歳のときである。

この年（明治四十三年）のことで今一つ記して置きたいのは『三田文学』の発刊である。それは慶應の先輩の間に、塾の文科を盛んにしてもつと文学者を養成すべきだ、との議が起り、結局、森鷗外に相談して永井荷風を教授として招聴し、また荷風を主幹として雑誌を出すことになったのだときいています。そうして、この機運に乗じて水上瀧太郎、久保田万太郎、佐藤春夫、松本泰等^たの作家が慶應から文壇に登場することになりました。

これより先き、私の心の内にも一種の文学的要求のようなものが動き、右の水上、松本や、のちに美術史家として慶應の学問に足跡をのこした澤木四方吉と、時々集まっては文学の話をし合う会を催していましたが、その仲間の内から澤木が先ず小説を三田文学に発表し、次いで水上、松本が書き、久保田その他もしきりに交際するという次第で、或る一つの動きがこれ等の青年の間に起ったといえましょう。

私は己れを知るといふのか、小説創作を企てたことはないけれども、友人の創作活動には関心を寄せ、たしかに彼らのための好い読者ではあったと思う。殊に水上とは、小学校以来の関係もあり、親同士の交際もあり、そういう感じ易い年齢でもあったので、互いに友情を示し合う機会も多くあった。彼れは後年、文壇と生命保険業界と二つの社会に重んじられる人物となったが、昭和十五年五十二で若死にすると、その全集の刊行は当然私の任務であるように人も自分も思い、岩波書店に出かけて往って交渉して水上瀧太郎全集十二巻を出したような次第です。

それは後年のことであるが、私が塾を卒業すると、差し当り何という名義もなく、今でいう助手のようなものに採用され、当分のところ別に教室に出て講義するような義務もないので、それを好いこととして水上等と一緒にしきりに文科の教室に出入して（水上は経済学部的前身、理財科の学生）永井荷風のフランス文学講義や小山内薫のイブセン講読を傍聴したり、一緒に芝居を見て歩いたりしました。丁度小山内薫の主宰する自由劇場が濠端の有楽座でゴルキイの「夜の宿」（どん底）を上演した頃であった。この「夜の宿」の舞台稽古も、小山内に許されて、見て興奮したのを憶えている。

荷風は、晩年は人を疑い、世に背く性情がいよいよ昂じて、噂によれば数千万という預金を貯えながら、看護する人もない病床に窮死したと伝えられました。慶應義塾に招かれた当時は、フランス帰り間もない時であって、長身のからだによく合った洋装は颯爽たるものであり、しかもその講義も、十分準備してきたノオトを低声で読む、という極めてまじめなものでありました。

荷風の慶應在勤はごく短く終り、また、晩年の作品や生活態度を私が厭わしく思うようになったのは事実であるが、しかし、或る期間、色彩と芳香が豊かで、また、世俗反抗の気概に富んだ荷風の作品が私たちの讚嘆の的であったことも十分の事実です。晩年の荷風のズボンに下駄ぱきという風体で歯も抜けたままで、うつけたような表情の顔を写真で見たり、そのいかにも正常でない生活ぶりの噂を聞いたりして、私は何ともいえない気持ちになりました。

私の文学書耽読と『三田文学』の仲間との交際は、ただ好きでやったというだけのことで、何の功利的の考えもあつた訳ではなかつたが、それは私にとつて悪いことではなかつたと思います。のちに、私は慶應義塾で社会思想史の講義を担当するのであるが、その講義をする上において、私がせまい経済学や社会学の本ばかりでなく、近代文学一般に興味をもつて読んでいたことは、或る役に立つたように思う。利益ということを考えず、ただ好きでやったことによつて、却つて利益を得るといふ人生の経験の、これもその一つと思ひます。

そうしている中、二年あまりして順番が回つて来て、私は慶應から経済学研究のため西洋へ留学させてもらうことになりました。大正元年（一九一二年）九月、船で神戸を立てて二カ月に近い航海をして、十一月初めに霧の深いロンドンのドックに着いた。

そして、一年ほどいて、ベルリンに移つたが、翌年の夏、戦争（第一次大戦）になつたので、また英国に帰り、更にパリに行き、大正五年（一九一六年）の早春、アメリカを通過して帰朝しました。

今では信じられないことであるが、当時の私たちは、アメリカの学問というものを軽視して問題にしていませんでした。現に私の如きも、三年あまりの年月をイギリスとヨーロッパには過ごしながら、アメリカはいえ、ただ帰り途に通過しただけである。しかもハアヴァアドもイエエルも訪わず、首府のワシントンにも行つて見ず、ただニューヨークのメトロポリタン・オペラだけは結構なものだと、ここに十日ばかりいて毎晩オペラハウス通いをして、あとは、あの広い大陸をニューヨークからシアトルまで素通りしてしまいました。それは無論、私の未熟と認識不足によるものに違ひないが、しかし同時に、第一次大戦前のアメリカというものが、経済の上でも、学問の上でも、まだヨーロッパに対して負債国であつたという事実は間違ひない。

私はイギリス留学中、国内を旅行してリヴァプールの港へ行つたことがある。折りから日の暮れで、入つて来た船の汽笛が低く太くとく、港中へ鳴りひびく。それはアメリカの小麦を積んで来た船だということでしたが、私はこうやつて小麦で、イギリスから鉄道敷設のため借りた金の利息を払つてゐるのだなど、その時思つたことを憶えています。事実その通りであつたと思ふが、ひとり資本ばかりでなく、学問も、アメリカは久しくヨーロッパから借りてゐた。殊に経済学者は、アメリカの大学を卒えると、多くは仕上げのためドイツへ留学することが例のようになってゐました。

アメリカの学問が飛躍的に進歩したのは、第一次大戦後、即ちアメリカが経済上にも債権国となつた、その変化以後のことであり、殊にナチドイツから優れた学者が逃避したことが強い一の原因になつてゐると思う。今日は、アメリカで学べない学問はない、といつて好い有様であるが、五十年前、自分が留学地を択ぶ場合に、当時アメリカというものを軽視したわけを考えて見ると、一寸これだけの変化があつたのです。

さて私はヨオロッパに三年あまりいましたが、すこしばかり講義のノオトを用意した（それも極めて不完全に）という以外、何もまとまった仕事はせずに帰って来ました。ただ、ヨオロッパを見て来たというだけのことであるが、しかし、二十四歳の若者が三年あまりヨオロッパで暮らして来たということは、やはり何かになっていると思います。

それでは、その見てきたヨオロッパはどんなものであったかというところ、それは第一にイギリスとドイツの建艦競争が危険になりつつあるときであった。イギリスの自由党政府は海軍拡張を決心し、同時にまた社会保障制度に大きい一步を踏み出して、養老年金の実施を決して、当時としては思い切った増税を企てた。そうして上院の反対に会い、一年（一九一〇年）の内に二度まで下院を解散して選挙民に訴えるということをした。

引続いて更に強制健康保険を実施しました。私がロンドンにいたとき、医師のストライキがあり、また、下宿の主婦は女中のために保険手帳に印紙を貼布するめんどろを、新来の客の私に訴えて、大蔵大臣（ロイド・ジョージ）を攻撃するという有様でした。

一方またバルカンが不穏であった。いまは小さな国になってしまつたが、オオストリアは、当時はハプスブルグ皇家によつてハンガリーと結ばれた大帝国であり、これがスラヴ人の住むポスニア・ヘルツェゴヴィナ州を併合したのが、私の渡英する数年前のことであつた。ところが、スラヴ人の背後には帝政ロシアが控えている。他方、オオストリアはドイツ帝国と同盟によつて結ばれている。ドイツとイギリスの関係は右に述べた通りである。実にあぶない話であり、また実際あぶないことになつて、第一次大戦は起つたのであるが、私が英国へ着いたのは開戦の二十カ月ほど前のことでありました。

私が日本を立つその直前に明治天皇が崩御された。国内にいる吾々はそれを思う違ちがひもなかつたように回想されるが、遠方から眺めるものは、これで日本の歴史の或る一幕は終つたという風に感じ、そのように評論したのもあつたと聞いています。

ただ天皇崩御の二年前に幸徳傳次郎一派によつて企てられたという大逆事件は、強いショックでありました。幸徳は無政府主義を奉ずるものと伝えられた。無政府主義とはいかなるものか、また虚無主義とはいかなるものか。無政府主義者がそれに訴えるという「実行宣伝」(propagande par le fait)、フランスに起つた急進的組合運動者(サンジカリスト)が唱えるという直接行動とはいかなるものか。人びとはそれを問題にし、博学な森鷗外は『三田文学』に載せた「食堂」という小説形式の一文で、その解説と評論を試みたりしました。

人びとはしきりに「危険思想」ということを言った。危険思想が青年にとつて魅力のない筈がない。当時、私たちの同僚や同年輩の友人に社会主義者と称すべきものは見当らなかつたが、多かれ少なかれ社会主義に対して関心を寄せることは、皆な一様であつたといつて好いでしよう。幸徳傳次郎、堺利彦の共訳による『共産党宣言』なども、私たちはすでに読んでいました。

堺たちは「宣言」を英訳文から訳したのであり、今考えると理解に不十分の嫌があり、訳語の不適當（殊にブルジョワジイを訳して紳士閣としたこと）な箇所もあったのであるが、訳者は二人とも有名な文章家であるし、その力強く引き緊まった文章体は十分青年たちを引きつけるものを持っていました。

けれども、後年或る機会に堺が率直に私に告白した通り、幸徳、堺兩人とも、久しくマルクスを知っていた訳ではなく、「宣言」の如きも翻訳するときに初めて読んだくらい次第であったということです。一方マルクスに対する批判が、これがまた幼稚なもので、当時大学教授側でマルクスをよく読んでいるといわれたのは福田徳三博士が第一で、博士は『資本論』全三巻を読み、自らその索引を作ったと伝えられ（その頃、まだ『資本論』の索引は出来ていなかった）、しばしばマルクスの深遠と難解については語ったが、これに対する批判としては系統的なものは何も発表してなかった。

当時すでにカント派法哲学者スタムレルのマルクス批判は、紹介されることはされていたが、よく理解されなかったと思う。ベエムの価値論批判、ベルンシュタインの修正、ヒルファディングの資本論展開は、いずれもすでにヨオロッパでは行われていたが、日本の学界はあまり問題にせず、概して呑気なものであった。

このような程度の知識で、私はロンドンに着いたのでした。

ロンドンのネルソンの記念柱の立つトラファルガー・スクエア。そのスクエアから北の方へオクスフォード街に通ずる街路がチェアリング・クロスオドという古本屋町であるが、その中ほどの東側にヘンダースンという、あまりストックのない書店があった。私は人にきいてこの店をさがしたのか、或いは偶然自ら発見したのであったか、もう憶えていないが、これが急進思想書の専門店であったのです。

入って見ると、棚は皆なその種の書籍、殊に小冊子類で一杯でした。『共産党宣言』は無論ある。ブルドン、バクウニン、クロポトキン、タツカアという無政府主義者のものはある。更に婦人参政権主張のものがある。自由恋愛主義のものがある。要するに、政府と私有財産制度と一夫一婦婚、その他すべて現行秩序に反抗する一切の主張の文書は皆な集まっているという次第であった。

そうして、それ等の文書は、明治末、大正初めの日本では、禁断の書であるか、或いは遠慮しながら買わなければならぬような出版物であった。禁断は欲望を煽る。私は何か秘密の鉅脈でも発見したような気持ちで、その店へ通った。選択せずに一棚そっくり買うようなことをしたこともある。それをしたところで、平たく並べた小冊子類が主であるから、値段は知れたものである。

これによって私は急に急進文書に対する知識を増した。他面、それに慣れっこになって、驚かなくなつたようにも思われる。

ロンドンに一年いて、私は予定の通りベルリンへ転学しました。三年の留学の一年をイギリスで過ごし、あとの二年をドイツで学ぶというのは、当初からの計画であったが、これは一つには私のドイツ語がより未熟だから長くいる必要があると思ったのと、今一つは、当時なんとなくドイツの学問の方が深いというような、一種の崇独思想が日本の学界にあり、私も幾分それに支配されていたのであったかと思われる。

ベルリンに来たのはもう十一月で、秋の学期には少し後れていたけれども、ベルリン大学では入学を認めてくれ、大学の間で簡単な式があつて、遅れた仲間の二三十人のものと一緒に、モオニングを着た総長と握手した。

ところが、その総長が誰れであつたか、いま私にいえないのである。これがアメリカの大学だと、イヤでも総長の名を憶えるけれども、ドイツの大学では総長 (Rektor) というものあまり重きを描かない。大学はみな国立で、大学の維持経営ということのため特別の働きを必要としないからでしょう。

その後四十年ばかりたつて、戦後西ドイツに旅行した機会に、有名なハイデルベルヒ大学を訪い、その学生で、アルバイトに旅行の案内もするという青年を頼んで連れて歩いて、色々質問する中に、今この大学の総長は誰れか、といったらその学生は答えられなかった。一寸異様であるが、そういう私自身、ベルリン大学で握手までした総長の名に少しも気を留めなかったのだから人のことはいえない。

しかし、大学の教授陣は立派なものでた。経済学の歴史にのこるシュモラア、ワグナア両大家がおり、労働者問題の大著で知られたヘルクナア、ユダヤ人であるためか不遇で、まだ助教授であつたフランツ・オッペンハイマアの名も吾々のよく知るところであつた。

大学はウンタアデンリンデンの大道に臨み、カイゼル・ウイヘルム二世の朱塗り自動車号笛を鳴らして疾走するのを時々見ました。更にスプレイ河の河向うには、高等商業学校があつて、そこにはやはり有名なゾムバルト教授が講義をしており、大学の学生は聴講料さえ納めれば、これもきけるというので、私は欲張つてききに往つた。

当時ベルリンにおける日本の留学生の一部には放縦の風があつて、大学の講義なんか馬鹿にしてききに行かないものもあつたが――また内地にいれば立派な一家の主人である年配の人が多かつたら、無理もないが――、外面的には私は勉強して、通学は怠らなかつた。

たしかに外面的には孜孜として勉めたが、内面的には落ち着かず、常に焦躁を感じていたように憶い起こされる。第一に語学力が不十分である。歴史、哲学、古典文学、ドイツ文化一般に対する教養が足りない。ドイツは思想と詩人の国 (Land von Denker und Dichter) だといつてドイツ人は誇りとするけれども、そのドイツの哲学や詩を、私はろくに知らない。いつもそれに気がひつかかる。そんなら当面の経済学なんか放り出して、その方の勉強をすれば好い訳だが、その決断も出来ず、目前の問題にも結構引きつけられるという次第で、どうも集中の足りない日々を過ごしていたように想い出される。

ドイツ留学中に第一次大戦勃発

それに、私には慶應義塾の空気が体に合うように、やはりイギリスの空気の方が体に合った。ドイツ、殊にプロイセンの官僚主義は肌ざわりがよくない。ベルリンでは下宿をすれば、すぐ最寄りの警察へ届出をしなければならぬ。大学で外套をぬげば、壁の外套かけに鎖が取りつけてあって、それを袖に通して錠を下ろせと要求する(たしか、そのための錠を買わされた。一度その錠を忘れて、外套を取る事が出来ず、真冬、あの厳寒のベルリンの町を、外套なしで歩いて、下宿まで錠を取りに往復したことがある)。

第一、街上に立つ警官がヘルメットを冠り、サアベルを下げているのからして気に入らない(その癖、日本の警官もその頃はサアベルを下げていたのであるが)。

要するに、万事手落ちなく行き届いて、息抜きの余地のないドイツ流の行政が、慶應義塾で育ち、更にロンドンに一年暮らして来た私に合わないところがあつた訳だが、これは説明してもよく分つてはもらえないかも知れぬ。

その少し前に鴉外が『三田文学』へ「襟えり」という題の錬訳小説をのせたことがある。多分行き届きすぎたドイツの行政に対する諷刺を主旨としたものであろう。

或るロシア人がベルリンにやって来る。百貨店でカラアを買つて、不用となつた古カラアを捨てる、何処へ捨てても、還つて来る。電車の中へ置き忘れても、国会議事堂の内へ隠しても、スプレー河へ投げ込んで、どうしても還つて来る。到頭気が変になつて、ふくれた人の腹へナイフを突っ込んで、そこへカラアを押し込む、そうして殺人犯人として処刑を言い渡される、という話である。私は出発前それを読んで憶えていたが、ベルリン滞在中、再三多少の同感をもつてその話を憶い出した。

こうして書いて来ると、私はベルリンでイライラしてばかりいたように聞こえるかも知れないが、それはそうではない。面白いこともありました。殊にベルリンは当時近代劇の本場であつたから、劇場通いも随分した。イブセン、ストリントベルク、ショオ、ヴェデキントの作の上場を、レッシング座、カムアスピイレ等々でかなり見たのは事実である。

そうしている中に日が過ぎて、一九一四年の八月、即ち第一次大戦開戦の八月が近づいて来た。

前に、オオストリアのボスニア併合のことをいいましたが、そのボスニアの都サラエヴォへ、機動演習を視に行つたオオストリアの皇儲こうちよフランツ・フェルジナンド大公及び同妃がセルヴィア人の一青年に狙撃暗殺されたのが、六月二十八日のことであつた。固もとより大事件には相違ないが、これが四年余に及ぶ世界戦争の発端になるうとは、私には思いも及ばないことであつた。

ところが、形勢は日に日に悪化してオオストリアの対セルヴィア(今のユウゴスラヴィア)最後通牒となり、その拒絶となり(七月二十五日)、ロシアが動き、ドイツが動き、フランスが動き、ドイツ軍がベルギーの中立を侵すと、イギリスも宣戦した。そうして当時イギリスの攻守同盟であつた日本はたちまちドイツの敵国となつてしまった。

日清戦争はもとより、日露戦争のときも、私は未だ一少年であつた。戦争がどのようにして起るものか、殆ど何の経験もない。それが殆どアツという間に、留学生として、敵国の真中に取りのこされるようなことになつたのである。

顧みると、オオストリア皇儲暗殺の当日、それは、晴れた日の夕方であったが、私は近所のテニスコートへ出かけて、プロを相手にゲエムをしていた。当時、ベルリン西郊のグルウネワルトには高級な「ロオト・ウント・ワイス」（赤白クラブ）というテニスクラブがあり、好いプレイヤアもおり、当時の皇太子もMEMBAだときいていたが、留学生の身分では、一寸そのクラブには入れない。已むなく近所の、冬はネットポールを抜いて水を撒いて氷らせてスケエトリンクとし、夏はテニスコートにするという安直なクラブへ時々通った次第でありましたが、そこでその夕べ、私がゲエムをしていると、コオトの管理人者兼食堂の亭主である中年男が、新聞号外を手にして駆けて来て、「ドクトル、大変だ。戦争になる」と叫んだ。その時は誰れも本気にするものはなかったが、実はこの男の直感が当たっていたのです。独身で、身軽な外国留学生よりも、妻子や業務に対する責任を負い、陸地つづきの敵国の恐ろしさを知るこの男の方が、遙かに真剣に問題を考えていたのでしよう。

いざ戦争となつてからも、私はまだ呑気な考え方をしていました。戦争はどうせ長く続くわけはない。平和になったら、真先に帰つて来て、かねての計画通り南ドイツの大学へ転学しよう、という考えであるから、ベルリン立ち退きということになつても、私は荷物を片付けもせず、手廻り品だけをスウツケエスにつめ込み、いずれまた帰つて来るから、というような挨拶で下宿を飛び出したものです。そうして、それから一九五三年まで、すなわち三十九年後まで、私は再びドイツを訪問する機会を得なかつた。

その間にドイツでは帝制が倒れ、ワイマール共和国が倒れ、ヒットラアが倒れ、ドイツは東西の二つに裂かれて、二度目に往つて見ると、私が学んだベルリン大学も、ウンターデンリンデンの大通りとともに東ベルリンに編入されて、距離は兎に角、思想的には遠く離れたものになっていました。

それは後日の話だが、さて、戦争となり、敵国人ということになれば、日本人は長居は出来ない。三々五々退去ということになつたが、慶應の留学生であつた三邊（金藏）、澤木（四方吉）、小林（澄兄）及び私は、共にオランダを経てロンドンに引き上げ、更にそこへアメリカから水上瀧太郎も来て参加したので、戦時とは思えぬような賑かな日々をすごすことになつた。

交戦国はそれから四年余り死活の闘争をした。日本も理論上交戦国ではあつたけれども、主戦場から遠く離れているから、存亡の危険は身を感じない。のみならず、後には、あらゆるものに欠乏している同盟国へ、あらゆるものが売れて売れて、日本は流れ込んで来る金の始末に困るというような有様になつた。従つてどうしても高みの見物ということになる。第一次大戦における日本人の戦争論には、動もすれば真剣さを欠くものがあり、それが後日の災いにもなつたかと思われる。

ドイツを退去する前、戦争の危険が迫ってから、殊に私の注目したのは、ドイツ社会民主党の戦争に対する態度でした。社会民主党は、そのとき帝国議会に百十一の議席を占める第一党であって、そうして当然国際主義、即ち戦争反対の主義を奉ずるものであった。

私は形勢がけわしくなり出してから、殊に注意して党の機関紙の『フオアヴェルツ』を読み、また戦争反対演説会にも行き、カラアの代りに頸にハンケチを巻いた労務者の群とともに演説をききました。しかし、受けた印象によれば、社会党が最後まで反対するであろうとは思われなかった。現に演説会に往って見ても、聴衆の喝采は、政府に対する攻撃よりも、いわゆる自由の敵であるロシア皇帝^{*}に対する攻撃に対して盛んであったというのが事実です。当時の日記を後年私は発表したことがあるが、それにも「この喝采は半ば社会民主主義より出で、半ば対露敵愾心より出づるものの如し」と書いてあります。そうして、結局帝国議会において、党の代表ハアゼは登壇して「……吾々は危存亡^{わか}の岐れるときに祖国を見捨てるものではない」といったのです。

イギリスへ立ち退いてから私は方々へ自分の見聞を手紙で報じたと見える。それに対して福田博士から来た返事の一節を憶えています。「愛国は恋に等しく、共に思案の外に有之候」というのである。私の批判的の語気を、少し単純すぎるといふ意味であったのかも知れません。その私とても、「労働者は祖国を持たぬ。彼等の持たぬものを奪うことは出来ぬ」という『共産党宣言』の文言を文字通り承認してはいませんでした。

さて、私の二度目のイギリス滞在ではその大半をケムブリッジで送りました。前にもいった通り、当時日英両国は同盟国であり、ケムブリッジ大学は（多分オクスフォードも）ドイツから追い出された日本の留学生を客分として、授業料なしで迎えるという特典を与えてくれたので、そのお蔭で、私たちは特定のカレッジには属せず、自由に聴講し、また自由に図書館に出入することを許されました。

有名な経済学者マアシャルはすでに隠退していましたが、後にケインズ革命を起こしたケインズ卿は、当時はまだ三十歳勿々の青年で、講義はしましたが、いかにも内気な、白面の少壮学者という印象を受けました。後にケインズの批判に対し古典経済学を擁護する立場に立ったピグウ教授は、その推理はいかにも緻密精細なものでありましたが、その弁舌は流暢とはいい難く、戦争で男子学生は続志願して軍籍に入って行ってしまい、そのあとに残った女学生を主とする聴衆を相手の綿密な講義はきいてあまり分り好いものではなかったが、これは分らないのは、こちらの力が足らなかったのだ、ピグウがケムブリッジの経済学にとって貴重な存在であったことは私もよく知っていました。

ケムブリッジは美しい大学町です。町の名にちなむケムという川が殆ど町を一周して流れているから、縦横曲折無数に通じる町の小路を、殆どどの方向に歩きつづけても、仕舞いには川に出る。その川にカナウを浮べて、ひとり町外れまで漕ぎ出し、舟をもやつて、舟一杯に横臥して本を読む、というようなこともよくやった。ケムブリッジでは尊敬されるボオトの選手が、脚を強くするため、揃ってその川岸の土手を駆け足するのにもたびたび出会った。また選手は舟を漕ぎ、コオチが乗馬で川岸を、舟とともに走りつつ、メガフォンで注意を与えているのにも出会ったことがある。

ケム川はケムブリッジを周るのみでなく、また或るカレッジの庭を貫いて流れる。その綺麗な水が、空の色を映じ水草を動かしつつ流れる景色は一寸他に比すべきものではありません。オクスフォード、ケムブリッジと並び称されるけれども、大学の中を貫き流れる川の景色では、一寸オクスフォードは及び難いところです。

思わぬ戦争のためイギリスに二度行くことになり、また図らずもケムブリッジで二学期すごすことになったのは、私の仕合せであったと思う。

春の学期が終って私はロンドンに上り、大英博物館付近の下宿に澤木四方吉、水上瀧太郎と同宿した。水上の小説『倫敦の宿』の後篇「都塵」にはこの下宿が描かれている。ここでツェペリンの空襲を受けたのも事実である。

*「開戦当時の伯林日記」『改造』大正十四年五月号『師・友・書籍』第一輯に収める。本全集第十二巻。

夏が過ぎて澤木まざイタリアに去り、次いで私、さらに次いで水上がロンドンを引き払って、こんどはまたパリの拉典区（ラテン）、大学（ソルボンヌ）前の下宿で三人落ち合うことになった。パリに落ちつく前に、私がひとりですイスを経てイタリアに往き、殊にフロレンスにゆっくり滞在したのは、澤木の影響によるところが多いと思われる。その頃の澤木はルネサンス期芸術に心酔していました。彼れが帰朝後『中央公論』*^{*}に出してフロレンスを描いた「花の都」という一篇は記憶すべき名文である。もしこれがいずれかヨオロッパのことばで書かれていたなら、恐らく諸書に引用転載されたであろう。或いはフロレンス市から感謝状ぐらいもらっても好いと私は思う。勿論、この文章の書かれたのは後のことであるが、ロンドンの宿で、私は何時とはなしに澤木からイタリアン・ルネサンスにつき、フロレンスにつき、多くのことを聴いていたので、特に気を留めてフロレンスに滞泊する気になったのである。

澤木と私は全く別々にロンドンを立ったのであるが、ロオマに来て彼れと出逢ったのは、奇遇でした。その時、彼れはすでに一月ばかりのロオマ滞在の後であったが、語学の才能のある彼れは、すでに相当楽にイタリア語を操り、また、イタリア風の袖もズボンも引き締まった、細身の服を着て、私を諸処案内してくれた。明日彼れはパリに帰り、私はナポリに行くという前の夜、二人で様子もわからぬロオマのキャバレエのようなどを渡り歩き、柄もなく二人でシヤムパンなどを飲んでシヤベリ続け、夜が明けかけて灯火の光りの薄れた街上で、それぞれ呼んだ辻馬車に乗って、右と左に別れたその暁のことなどを、私はほとんど半世紀後の今日、想い出しています。

帰朝後の澤木は、兎角多病で研究にも講義にも思うだけの活動は出来ず、短命に終った*^{**}が、彼れの繊細な感受性と孤高独往の精神は、学生に多くのものを与え、たしかに塾の文学部に或る影響を残した学者だったといえるでしょう。

さて、また吾々はパリに集まって、前記の通りソルボンヌ（大学）付近の安ホテルに同宿したが、やがて戦争は三年目となり、ルウヴルもオペラも閉鎖され、人口の乏しいフランスは文字通り真に国中の人を尽くして戦うという有様で、電車の車掌もみな女となり、一時の休暇で前線から帰宅を許された兵士らもあの青色の軍服のまま家業の店の手伝いをするという風でした。

夜のパリには apache と（ガルデニール）いう無頼漢がいて、突然物蔭から人を刺したりするから、夜独りで歩くときは道路の真中を歩け、と注意されましたが、或るとき必要があつて、深夜ひとりで相当の距離を北停車場まで歩いたけれども、何も出なかった。私に注意した人は、それをきいて、戦争でアパシユも戦地へ出はらってしまったのだらうといつて笑つたが、それは笑談のような事実であつたかも知れません。要するに私たちの当時滞在したパリは平時のいわゆる「花のパリ」とはおよそ違つたパリでした。

この頃、私たちも留学三年目でいささか遍歴に倦んだという気分です、私はソルボンヌに一二の講義をききには通つたが、あまり集中的に勉強はせず、三人同宿のホテルに、それに近所にいた島崎藤村その他も時々加わつて、雑談ばかりしていたように回想される。島崎氏は、後のその作品によつてみれば、当時一身上に深刻な苦悩を抱き、いわばパリに逃避していたのであつたが、そのような事情は勿論、吾々には察せらるる筈もなく、ただ沈鬱ともいえるほど物静かな態度で、吾々若者の談話をきき、時々口をはさむという風であつたことが記憶にのこっています。

* 大正六年四月号。この文章は同年十一月、日本美術学院より刊行の『美術の都』に収められた。同書は大正十五年二月、東光閣書店より改版出版され、更に昭和三十九年一月、岩波書店より改版出版された。この岩波版に著者の澤木四方吉三十三回忌記念講演「澤木四方吉と慶応義塾」が載せられている。また同講演を『三田評論』三十八年二月号に「澤木四方吉と美術史」と題して掲げ、『ペンと剣』に『三田評論』の発表題で収録している。『ペンと剣』は本全集第二十巻に収められる。

** 明治十九（一八八六）年十二月十六日生れ、昭和五（一九三〇）年十一月七日歿。数え年、四十五歳。

帰朝後、塾の教授となる

やがて吾々の帰朝の時が来て、今度も澤木先ず去り、次いで私、最後に水上が後れてパリを立ちました。澤木は、その頃新進作家として名の出かけた水上を、慶應義塾の文科教授に招聴して一処に働こうという考えを抱いて、水上帰朝の後に申し出で、水上も少しは考えたかも知れないが、結局物にならず、彼れは父が社長であった明治生命保険会社へ入社しました。

私がパリを立ったのは一九一六年（大正五年）の二月某日。イギリスに一寸立ち寄り、リヴァプールからアメリカ船でニューヨークへ渡りました。当時アメリカはまだ参戦せず、船腹にペンキで大きく星条旗を描き、夜は強力な電燈でそれを照射しつつ、ドイツ潜水艦の出没する大西洋を、戦々競々として航海した。ひどい荒天で、十一日かかって漸くニューヨークへ入港するという始末で、ハドソン河の水面を埋める氷塊を押し分けつつ着岸しました。この航海の終りの頃になって、食卓がひどく貧弱になったのは、延着で、用意の食物が不足を告げ出したためであつたろうと、半世紀後の今日この記事を書きつつ、はじめて気がつきました。また、ニューヨークへ着いて、はじめて自分が後にして来たフランスで、ドイツ軍のヴェルダン要塞大攻撃が開始されたことを知りました。

当時私が認識不足で、アメリカというものに興味を持たず、あの大陸を東から西へ素通りしてしまつたことは、前に書いた通りです。そうして三月下旬に帰国して、足かけ五年ぶりで塾に出頭して師友に会い、早速四月から授業開始ということになりました。これから昭和八年十一月まで、十七年あまりが私の大学教授時代です。

今から回顧すると、この十七年は随分面白い十七年であつたと思います。大学教授の仕事は勿論楽な仕事だといえないし、殊に待遇は、誰れも承知の通り、甚だ薄い。けれども、教授の負担する義務とその報酬ということを考えて、随分悪くない商売だ、と私はよく思つた。早稲田も同様だろうが、慶應など当時の私立大学では、帝国大学に比べて教授の負担時間は多い。けれども、多いといつても十数時間であつて、大抵のものは週に三日も出講すれば、義務を果たすことが出来る。あとの時間は、研究に費す、ということになつてはいるが、遊んで暮らそうと思えば、暮らせないことはない。私なんかも随分遊びました。

その外にあの夏休みがあり、冬休みがある。ただ春休みだけは休みにならなかつた。春休みには、試験答案の採点をしなければならぬからです。これだけは他の世間の知らない苦しみで、採点報告の期日が迫つて、しかも未閲の答案は机辺に積み上げられてあるときには、何を間違えて教授商売なんか扱んだのだろうと思つたこともある。実際私は教授になつてから昭和二十二年に塾長をやめるまで殆ど三十年間、桜の花というものをゆつくり見たことがない。花の季節が丁度学年または入学試験の季節なのである。

胸を病み一年半ほどを読書で過ごす

花もまたあはれと思へ大方の春を春とも知らぬわが身を

これは十五代將軍徳川慶喜の歌ときいている。慶応四年、慶喜が鳥羽伏見の戦に敗れて江戸に帰り、上野の寛永寺に蟄居ちつきよ謹慎中の或る日、庭上の桜を見て詠み出でたものであるという。私は教授時代、偶々路傍の花などを見て、よくこの一首を憶い出して慶喜公の心を察し、それを人にも語ったことがある。たしかに大学教授にとつて春は苦難の季節である。

けれども、苦情をいえばこの通りであるが、そんなら外にどんな商売があるかといえ、これほど自由で、これほど自分に適した職業は何処にもない。慶應義塾に採用してもらつてウマイことをしたというのが全くの私の本音で、その点で長年の間に不平を抱いたことは一度もありません。

ただ一度病気を少し困りました。当時私は水上瀧太郎の妹と結婚して鎌倉に家を持っていましたが、西洋留学から帰つて二年ほどして呼吸器を害したのです。今なら何でもありませんが、その頃はレントゲンで診るのに鎌倉から本郷の帝大病院まで出かけて来なければならぬという時節であり、薬剤も療法も今から見ると幼稚なものであったから、人にも心配をかけました。

その時帝大病院のレントゲン室で写真を取られていると、後ろで医者が二人でドイツ語まじりで私の胸の蔭のことを話し合っている。「*Einmal in der schLank* 人には免れんな」といふ。schLank はほつそりしたというくらいの意味である。今日の私は体重二十貫以上もあり、誰れも私をシユランクとはいつてくれないが、その頃の私は瘠形の人間であつたのか、この病気を境に體質が變つたように思われる。

病気は勿論結構なことではないが、私の場合さしたる苦痛はなく、ただ静かにしておれば好かつたのであるし、また、偶々私の主治医は読書好きで、少しも読書を禁じなかつたから、私はこの静養中に随分本を読むことが出来ました。当時はまだ日本ではあまり広く読まれていなかったトルストイの『戦争と平和』なども、私はこの機会に通読した*。コンスタンス・ガアネットの英訳本で読んだのであるが、寝ながら読む病人の腕には、あの英語の一冊本は重い。私は幾度も本を措いては腕をさすりさすり、また取り上げて遂に読み了えたことを憶えています。そうして一年半ばかりの静養によつて私は健康を回復し、職務に差支えなくなつたので、元のように講義と研究指導をすることになった。

一方に記すべきは、私がだんだん新聞雑誌にものを書き出したことである。

私が帰朝して鎌倉に家を持ったのは大正五年、即ち一九一六年の暮であつたが、その翌年の三月、ロシア革命が起つて帝政が倒れ、更にその年の十一月、当時日本では過激派と呼ばれたボルシェヴィキ即ち今日の共産党が政権を取り、それ以来その政権が今日まで続いているのである。次いで翌年、第一次大戦は終り、戦争景気の日本には恐慌が起り、各地に米騒動が起り、戦後の社会不安が人心を脅かし、5・5・3比率のワシントン海軍軍縮条約が結ばれ、次いで大正十二年の関東大震災が来た。

この間に私は幾つかの当時の総合雑誌から（当時まだ総合雑誌という名称はなかつたと思うが）寄稿を求められて論文を発表するようになって行つた。

* 『改造』大正十一年二月号の「読書欄」（最近の著書で尤も会心の書一人一書たること、としてこの号から設けられた）に、著者は「改造社の間に接して直ぐ念頭に浮んだのは数年前に読んだトルストイの『戦争と平和』である」といつている。また『三田評論』昭和三十一年四月号の、鎌田榮吉二士一面忌追悼号に、クツゾフ將軍を語つて鎌田榮吉塾長に及んでいる。なお著者の『戦争と平和』の感動については『読書論』岩波新書一六〇頁、本全集第十四卷三五六頁以下参照。

もと私は西洋留学中、社会思想と経済理論の問題に興味を持って、多少のノオトを用意していました。それは戦争も革命も起らぬ以前からのことでありましたが、図らずもロシア革命が起り、また第一次大戦が終って、ここに戦後の世界にいかなる社会を建設すべきかの問題が起って来た訳です。今日から顧みると、当時誰れも先きの見透しを持っていたものはなく、また、それが当然の次第でありましたが、しかし、人々が争って社会改造について、今まで思想家によって唱えられた様々の提案について知識を求めたのは当然でありました。

『解放』『改造』その他これに類する名称の雑誌が相次いで企画創刊された当時のことは今も私の記憶に新しい。社会主義、共産主義、無政府主義、虚無主義、サンジカリズム等について、なにがしかの知識を持っているものは、しきりに寄稿を求められることになり、私も期せずしてその一人にされて、留学中に作ったノオトが役に立つことになりました。改造社社長の山本實彦及び幾人かのその社員、また、これは当時まだ雑誌は出していなかったが、岩波書店の岩波茂雄等は、しきりに物を書かせるために私の家へ尋ねて来るようになった。そうして私も少し世間に名前が知られて来たように見える。

これは実は意外な成り行きで、元来私は慶應義塾の内も内、それこそ文字通りその構内に成長したものであって、世間見ずの仲間でも、その最も甚だしき一人だと自ら認めていた人間であるのに、図らずも世間に出しゃばって、物を書く人間となり、それが後年、即ち今日の私の仕事ともなったのは一体どういうことか。中学時代の私の同級生などで、私が後日作家になるなどと予想したものは恐らく一人もなかったことだろうと思います。人事図り難し。これも思いがけないことの一つです。

このように物を書くことについての私たちの、いわば稽古の道場は、慶應の学術機関誌、今もある『三田学会雑誌』で、水上や久保田や佐藤等が『三田文学』から文壇へ登場したように、私たちの学界への登場は最初『三田学会雑誌』によったものといえましょう。私も或る時期、随分よくこの雑誌へ書きました。長年の間その編集に当り、寄稿家を書き渋ったり、原稿を切りに後れたりするのを、よく辛抱してこの雑誌の刊行を続けた高橋誠一郎の功績は大きいものと思います。

著者評論者としての私の立場についていうと、私は何時かマルクス批判者ということにされたらしい。そうして、それに異存ありません。私はたしかに批判者であった。私は多くの同時代人と共にマルクスイズムというものに対して多くの関心をいだき、或る点その影響も受けている。しかし、結局彼れを、誤謬なき (infalible) ただ一人の人と見ることは出来ない。彼れは私にとっては異色ある多くの思想家の中の一人に過ぎない。これがマルクスストと私の違う点であったと思います。経済理論においても、国家論においても、歴史哲学においても、マルクスの主張は全くの謬り^{あやま}ではない。否、非常に多く価値あるものを含んでいることは、幾度もいわなければならぬ。ただ私は彼れの革命家としての局視或いは焦躁による多くの誇張と偏説に同意しないというだけである。

例えばマルクスは或る場所で、「人間は自分の歴史を造るが、しかし、それを自由なる材料から造らず、自ら選択した事情の下に造らず、直接目前に与えられた伝来の事情の下にこれを造る」という。たしかにそうである。人は自分の歴史を造るが、今日は昨日から生れて昨日の束縛を受け、明日は今日から生れて今日の束縛を受ける、この点において歴史の経過は自由でないということは、十分の真実である。ただ、生産力の発展は、世界を、不可避的に共産主義の実現という、ただ一つのコースの上に押しやる、というに至って、また、共産主義の実現とともに世界史の進行はやむかの如く説くに至って、それは許し難い誇張と独断だ、と私は見るのです。

価値理論、再生産理論、国家論等々において、私はしばしば同様の誇張と偏説を感じ、それを批判した。しかし、それはマルクシストとしては許し難い批判であつたらう。私の批判は、屢々マルクシスト側からの反批判を受け、殊に価値理論、価格理論について論争という次第になつた。今から顧みると、少しそれに時をかけ過ぎたように思うけれども自分の考えを自分自身にハッキリさせることは役立つように思います。

私が論争した相手のマルクシストは山川均、河上肇、榎田民藏等であつたが、みな故人になりました。山川は独学自成人ときいたが、信念が堅く、勉めて怠らず、遠方から見ると求道者の趣きがあつて、多くの大学出のマルクシストに比べ鍛えがちがうという感じを受けた。同年輩の人と思つて紙上で議論などしたが、あとで言えば、私より相当の（八年）年長者でした。

大正十二年、大震災を機会に鎌倉を引き払つて東京に移り、それから今日まで四、五回住居をかえました。東京に住むことはずっと変わらず、健康も回復し、学問のコツというようなものも少し分り、私の教授生活は大体好調でした。ただその間一度昭和三年にシナと満洲を見て来ました。

これより先き証券界の成功者望月軍四郎という人が（この人は後に私が塾長のとき、当時としては前例なき、百万円という大金を慶應に寄付した人であるが）、シナ研究の必要を痛感して慶應にシナ基金というものを寄付し、私もその運用委員に選ばれていました。その金を貰つて旅行して来たのです。

神戸から大連に渡り、奉天、ハルビンに行き、また大連から天津に渡り、北京に行き、船で青島に寄り、上海にしばらくいて二カ月足らずで帰つて来た。当時として通り一遍の旅行であつたが、それまで、私はシナ、満洲に対して不注意であつたから、やはりこの視察で幾分目を開かれたといえるでしょう。それは蒋介石の北伐時代、また六月に奉天市外における張作霖爆死事件の起つたその年の秋のことです。

この旅行で、当時満鉄の調査課におり、現地の青年学徒から尊敬を受けていた橋樑（たかはなきしむき）に紹介されて知り合つたのは一つの収穫でした。私は彼れと語つてその学殖を知り、大連の図書館へ通つてその時まで雑誌『満蒙』に掲載された橋の論文を皆ながし出して読んだ（旅餐も目数も限られている旅先きで図書館で本を読んでは不経済な話だ、と自分で思いながら、やはり読んだ。今では珍しくないことだが、橋がシナ社会の階級層に注意しているのに興味を感じて、橋にそれをいうと彼れもうなずき、「やはりマルクスには教えられますなあ」といった。

帰京の後、私は人にこの人のことを語り、それにより、『改造』であつたか『中央公論』であつたか、橋の論文が二三度載つたことがあります。彼れは当時すでに脊椎を病んでいたのではなかつたか、凝然たる表情で、あまり笑わぬ人のように記憶するが、しかし、ユウモアもあり、私の話の途中、満鉄の何かの会議で中座するのに、立ちながら「これから小田原評議に出ますから、失礼します」などといった。

上海では、伝手^{つて}があつて、ヤミルウトのようなものを通じ、中国共産党関係の書類を手に入れた。当時はすでに蒋介石の対中共クウ・デタア後の上海であつたから、左派の人々は潜行活動をしているのであつた。私は或る日、紹介者の指示の通り、歩いて土塀の続く屋敷町の或る家に行き、一人の中国人に会い、いうままの金を渡し、書類の一包みを受け取って抱えて帰って来た。その金額は、私の思つたよりも高く、「高いな」と思いつつ金を渡したことを憶えているが、一寸したスリルであつた。帰国して、私はその書類を慶應の図書館に寄贈した（私はその時図書館長をしていた）が、ほとんど三十年後の最近、中国共産党問題専攻の新進学者（石川忠雄）から、私の寄贈文書を利用して益を得たといわれたのは、私としては望外の次第です。

北京には、十日あまりしか滞在しなかつたが、私の癖で、早速語学の教師を頼み、滞在中、シナ語の発音と会話の初歩を教えてもらいました。教師は、東京に留学し、日本大学にしばらくいたという中年の学校教員でしたが、北京飯店^{ホテル}の一室、紫禁城の黄色い屋根瓦の見える窓の下で、くり返しシナ語のアクセントをいわされたことを憶えています。シナ語の音を美しいと思ひ、偶々携えた小形本を開いて、白楽天の琵琶行を示し、これをシナ音で朗読してきかせて下さいというと、彼れは本を取り上げ、やや声を張つてそれを朗読し、しきりに珍しうに「美しい、美しい」というので、きいて見ると、始めて読んだというには驚いた。偶々この人物が琵琶行を知らなかつたのか、それとも、一般に白楽天を読まぬ中国人が多いのか。兎に角意外に思いました。

反対の失敗もある。或る要人の家に晩餐に招かれていつて、食卓の談話の間に、『紅樓夢』を翻譯で読んでみたが、あまり面白くなかつた、というと、これはほとんど総攻撃で、「飛んでもない」といわぬばかりに人々から反対された。これは一言もない。原文の読めない私は、『国訳漢文大成』本を、しかも拾い読みのような読みをしたにすぎないから、それで兎角の意見をいうのが、抑々^{そもそ}の間違いだつたのであるが、しかし、『紅樓夢』というものが、これほどかの国の人々に愛読されているのだという事は、実は知りませんでした。

シナから帰つて、また平坦な教授生活に復したが、それから三年後の秋、満洲事変が起り、更に六年の後シナ事変となり、更に四年の後、日本は太平洋戦争に突入した。この間に処して、私はこの経過をどう見ていたかというに、あとになって、体裁よく、辻つまの合つたような説明をつけることは容易^{たやす}いが、実はこの十年の間に、認識と決断の上で、私は無数の過ちを犯したというのが事実である。

第一に、シナと日本の友好和平を願う、その祈願の真実であつたことは誰れにも争うことを許しません。また慶應義塾の学風として、他国に対し、殊に後進国（当時のシナは明らかに後進国であつた）に対し、尊大不遜の態度で臨むようなことはしなかつたつもりだとは、誰れに向つてもいえるつもりです。けれども他面、吾々は日露戦争が日本にとり死活の闘争であつたことを忘れていません。それによつて勝ち得た満洲の權益というものを、日本人は忘れることは出来ないと思つていました。その間に矛盾があり、その矛盾を、日本人もシナ人も解いていなくなつたと思ひます。日本人が中国人の最も真実なナショナリズムを十分理解し、諒察しなかつたことは、幾たび答められても好いが、同時にまた、中国人は、日露戦争が日本人にとっては冗談事ではなかつたこと、その日露戦争は、清国さえしつかりしていれば、戦わなくても済んだこと、また満洲における權益を、日本人は血をもつて贖^{あがな}つたと、信じていたことを、知るべきであつたと思ひます。

さて慶應の学窓における私の日々は無事に過ぎ、その間に嘗て教えを受けた田中萃一郎（大正十二年）、堀江歸一（昭和二年）、福田徳三（昭和五年）という旧師たちはだんだんに亡くなり、何時か自分が壮年者になったように感ずることがあるようになった。その間に、業績というほどでもないが、著書や論文も幾つか世間へ発表して論評を受けました。その中で、いわば商業的に成功したといえるのは（といっても、今日から見れば大したことではないが）私の『近世社会思想史大要』である。これは、慶應でする講義の筋書きのようなもので、近世社会主義思想の大体を、極めて平易に述べただけのものであるが、時の必要に適したもののか、相当世に行われ、左翼作家の小林多喜二なども、この本を読んだことを何かに書いているそうです。

但し、この本の著述も、偶然の思いつきに発したものである。というのは、その頃、同僚教授に成瀬義春という親しい友がおり、前年来、『財政経済時報』という雑誌を経営して、売れないで困っていた。そこで慶應の私の聴講者のノオトブック代りになるようなものを連載したら、少しは学生が雑誌を買うであろうと思ったのが執筆の動機である。やってみると、多少の効果があり、幾分雑誌の維持を助けたということであるが、その完結を待つて一冊にまとめて岩波から出したのが、この本です。

今この本の奥付を見ると、初版を大正十五年十一月に出し、増訂第三版を昭和三年の八月に出している。そうして、この増訂版に至って始めてマルクスの唯物史観に対する私の批判を載せている。この重要な問題に対する私の立場は、およそこの頃になって漸くハッキリしたのであったことがこれで分ります。それについて元来、哲学素養が不十分であったから、ヘゲルその他の原典を読むのは、少し骨が折れました。屢々哲学科の教授（川合貞一、船田三郎等）の教えを乞うたことを憶えています。

昭和八年、即ち一九三三年はマルクスが一八八三年にロンドンで死んでから丁度五十年目に当る。私はこの機会にマルクシズム全体に対する自分の考えを纏めて発表して置きたいと思い、『改造』の二号に互って「マルクス死後五十年」と題するやや長い論文を書きました。更にこの論文を主軸とし、更に他の諸篇をも合せて同じ『マルクス死後五十年』という題の単行本を、やはり改造社から出した。この論文及び著書は、マルクシズム研究の、私としては最も熟した成果を収めたもので、一方で反対批判も受けたが、他方、賛成意見もきくことが出来た。仮りに誰れか外国の学者で、私の対マルクス批判をききたいというものがあれば、自分としてはこの一篇を示したいように思っていました。

ところが、私はこうしてゆっくり読んだり書いたりしていられない身の上になりました。その年の十一月になって、慶應の塾長に選ばれたからである。元来慶應では、大学を卒業したものの、或いはそれに準ずるものを塾員（校友）と称し、この塾員が投票によって評議員を選び、この評議員会が四年毎に塾長を選ぶという制度になっている。いわば塾員が現行憲法における国民で、評議員会が国会、そうして塾長は総理大臣に相当するという次第です。私の前任者は私の旧師で、私と親交のあった林毅陸氏であったが、二期塾長を勤めて、この時退き、代って私が選ばれた次第である。何故私がこのとき選ばれたか、きいて見たこともないけれども、すでに度々記したように、私は父の代から慶應のものであって、前記の評議員中には父の友人または後輩が多いから、その人々の目から見れば、私に塾長をやらせることはまことに無事の感じがしたであろうと察せられる。その人々が、私に大学経営の才能があると思っていなかったことは慥かである。第一、本人の私が誰れよりもよくそれを知っている。

私が塾長に選ばれたのは十一月二十一日であったが、そのあとで、私は新聞記者に会見している。何新聞か憶えないが、その翌日号の切り抜きが、偶然私の手許に保存されているのを見ると、私はそこで、記者の間に答えてこういつている。

「前塾長の方針をそのまま踏襲するばかりです。学校行政には極めて無関心であったからこれから勉強するつもりです。学生諸君にはあらゆる意味で勉強して欲しいことです」

当時の評論家杉山平助がこれに対し、私が新任の抱負などを語らないのは宜しい、といってくれたのは有り難いが、それは買ひ冠りである。抱負があつて語らないのではない。なくてマゴついたのである事実であつた。

但し塾長を輔けるべき常務理事に人を得たのは幸いでした。その一人は私より十歳以上も年長の堀内輝美君、今一人は目下防衛大学の校長をしている榎智雄君である。

これより先き前塾長時代に、三田の山がすでに狭隘を告げるといっているので、大学予科その他を神奈川県（今は横浜市港北区）の日吉台に移すことが決定されていた。そのために要せらるる資金が当時の金で三百万円、即ち今の金にして十四五億円。先ず校友その他世間の有志に訴えてこの資金を集めなければならぬ。他方その資金で校舎その他の施設を築造しなければならぬ。その建築の方は榎君が一人でやった。今の日吉台の校舎、寄宿舎、運動場の大部分は同君の仕事として記憶さるべきものである。

また一方の資金の方は、これは堀内君がやはりほとんど一人で奔走して集めた。集めたのみならず、予定の三百万円を容易く突破したので、目標を引き上げ四百万円とした。その四百万円もさして困難なく集めることに成功したのは、記録すべきことです。更にその上、彼は前にも一寸話した望月軍四郎氏に、教職員退職資金補給のために、やはり当時としては大金の百万円の寄付を申し出させている。そんなら、その寄付を懇請したのかというと、そうではなく、望月氏の方で、何となく堀内のために金が出したくなって申し出でたというのが真相に近い。この堀内の力は不思議という外はない。

風采は何といったらよかるうか、もし一部の世間に、慶應出身のものは身綺麗にしているという通念があるなら、それは堀内によつて破られたでしょう。ズボンのボタンをかけ忘れたり、間違えて他人の外套を着て帰ってしまったりすることは、彼れにおいては常習であつた。たしかに一種の雄弁家ではあつたけれども、お世辞は、義理にも好いとはいえず、朝夕の挨拶もろくにせず、私たちが話しかけても応答しないようなこともあつた。それには、流石堀内ファンの望月氏も不満だつたこともあるらしい。望月氏が前記の寄付をするといったときにも、堀内君はろくに礼もいわなかつたものか、「堀内君は一体よるこんでくれているのだからか」と望月氏が人に向つてツブヤイたということが、榎君を通じて私の耳に入つて来たことがある。

それで、榎君と私と二人で、或る先輩を訪問して、堀内君の真意の先方によく伝わるようにと配慮してもらつたことなどもありました。

一方の榎君は、防衛大学校長たることやがて十年であるから、もう軍人教育者としての成績に対しては定評があることと思ひます。『中央公論』二月特別号（昭和三十七年）に彼れが寄稿した「防衛大学校の毎日」の一篇は彼れの経験と抱負を語つたものとして、殊にその軍人学生の義務と個人の威信との調和を説いた幾節の如きは、教育者必読の文字と称して差支えないものと思ひます。

* 昭和二十七年八月十九日より四十年一月十六日まで在任。（就任当時は保安大学校長。保安大学が昭和二十九年六月九日成立の「防衛庁設置法」によつて防衛大学校となつた——防衛庁人事三課による）。

塾長の輔佐者はこの通りとして、塾長自身はその間何をしていったのかということになると、取り立てて語るべきことはない。強いていえば、学生に接触することと、慶應の学者の業績に注目することは、自分の担当だという風に私は思っていました。しかし、それも努めてしたというよりは、好きでしたという方が当たっているかも知れない。

当時の大学総長の間で、私は学生とはかなりよく交際した方だったと思います。各種の運動競技を見に行く。案内されるままに各種の会合、会食に出席する。富士山麓で行われた学生の野外演習も、わざわざ見に行きました。また私の自宅へ遊びに来る学生と話をすることも、随分多くなりました。その中に、毎月第一木曜日の晩に私の宅に集まる雑談会を、何時か人々は木曜会と称し、だんだんその人数がふくれて行きました。もとは教授時代の私が自分のゼミナールのメモバアと火鉢を囲んで、研究会の話の続きをする小さな談話会だったのが、だんだん卒業生も来る集まりとなり、更に私が塾長となってからは、新入学の大学予科生も参加することになり、それに有名な夏目漱石の宅の集まりが暗示となつてか、私の家の集まりも木曜会と呼ばれることになったのです。

その頃、私は品川の御殿山に住んでおり、階下の八畳の間が会場だったが、到頭この八畳に二十人八畳つめ込むというレコオドを作ってしまった。それで私も考えて、増築に決し、二階に八畳十畳二間ぶちぬける座敷を用意しましたが、私が塾長になってから、客の数は急増して、到頭そこへ六十人以上つめ込むという第二のレコオドを作ってしまった。その頃は軍事教練が行われていたから、客の数を数えるのは訳なしでした。一通り客の揃ったところで、私が「一」といって右隣の学生を顧みると、彼れは「二」といい「三」「四」「五」……と五六十人ぐらいは忽ち数えてしまう。玄関の履き物の整理が厄介なので、下足番を雇おうかなど、妻と話し合ったこともありましたが、それは到頭なしで済ませた。

それは好いが、六十人の青年が二階に上つて、その体重を仮りに平均十五貫とすれば、九百貫の重量をのせることになる。その頃まだ生きていた私の老母がしきりに心配して、二階の根太が抜けはしないかと、たびたび私にいう。私も少し気になって、技師に尋ねて見ると、大抵大丈夫でしょう。但し六十人がワツと一時に立ち上がったりと、何ともいえません、という。それで、次ぎの集まりのとき、一同に訳を話して、仮りに地震などがあつても立ち上らないでくれ、といったら、学生はどつと笑つた。私が冗談をいったと思つたらしいが、実は多少本気で心配したのです。

しかし、こんな多人数になると始めの頃のように、静かに彼れ語り我れ語るといふ訳には行かないから、どうしても私が一席弁ずるといふ形になり、年少の学生は坐り直して「お話拝聴」といふ盜勢になり勝ちでした。これは何とかかしたいと思つたが、どうもこのように人数が多くなると方法が立たず、そのままで続けました。尤も堅苦しい話ばかりしていた訳ではなく、皆なでヒイキ女優の評判なども随分やりました。

このようにして日がたつて行つたが、昭和十七年の秋、私の悴が、これは慶應を出て二年現役の海軍士官として出征していたのであるが、それが太平洋で戦死したので、木曜会も自然暫らく休会と触れ出したが、その中戦局が益々困難となつて、学生は皆な出ることになつたので、休会がそのまま解散となつてしまいました。もう二十年前の昔語りであるが、この頃も、時々、木曜会でお邪魔しました、という人々に会う。

私としては塾長時代の一つの思い出になりました。

それからまた、私は学生の行儀のことを少し喧ましく言つて、例えば、大の男は汽車や電車の中で、女子供や老人には席をゆずるのが当然だというような注意をした。これに対し、そんな末節の注意をするのは大学総長らしくないという批判もありました。また、私は音楽が好きで、よく学生の演奏会や塾歌の合唱練習をききに行ったりするのを、友人が冷かして、慶應義塾に礼楽を盛んにするつもりか、といった。「そうだ」と答えたことを憶えています。

慶應の学者の業績に注意する方は、これはごく自然に出来ました。当時は、慶應に文、経、法及び医の四学部しかなかったが（その後に至って工学部が加わる）、それぞれの学部の教授、助教教授たちは、著述をすれば、大抵塾長に一部くれる。それを私は注意して目を通した方です。尤も、医学部教授の書いた専門的のものは、私にはわかる筈もないけれども、しかし、これこれの業績が出たということを知るのには、塾長としてたのしいことであつた。文、経、法方面のことは、一通り興味が持て、私の四十代のその頃は読書欲も旺盛であつたから、ひとり経済学と限らず、随分多く読みました。今日でも、慶應では年々一度、学内学者の業績を選んで（更に教育実践上の功労者をも選んで）表彰することをやっていますが、これは多分私の塾長時代から始まつたものと思います。

これは勿論私が、いわば好きでやつたことで、別に人からきいてそれに倣つた訳ではなかったが、一九三六年にハアヴァアド大学創立三百年式典があり、それに列席するためアメリカに行つて、各地の大学を見て廻る間に、立派な、好い前例があつたのを知つて、大いに意を強くしました。それはジョンズ・ホプキンス大学の初代総長ギルマン博士の前例です。アメリカの大学で最も歴史が古く、名声が高いのはハアヴァアドであるが、歴史を読むと、時として真の大学は、一八七六年ボルチモアにジョンズ・ホプキンス大学が創立されたときに始まるというように説いているものもある。そのジョンズ・ホプキンスの総長がダニエル・コイト・ギルマン博士である。博士は在来の大学に満足せず、大学院というものを設けることによつて、大学の大学ともいふべき最高学府を起すことを企てたので、この大学の名声は一時ハアヴァアドをさえ凌ぐといわれたものだということである。

ところでこのギルマン博士の主張するところは、大学の主体はすぐれた研究をする学者であつて、建物その他の有形的設備ではないというにありました。或るとき新聞記者が、この大学の設備の貧弱を潮けて、この大学では講義をテントの下で行い、書籍をシャボン箱に保蔵する、といったのに対し、ギルマンは「正しくそれが吾々の期するところだ」といったことが伝えられています。勿論、これは売り言葉に対する買い言葉であつたでしょうが、このギルマンの理想主義には清新なるもの、新鮮を感じしめるものがあり、私は読んで大いに意を強くしましたが、さてそのギルマンが、この大学の学問を盛んにするために、努めてしたことは何んであつたかというところ、それは教授等の学問的業績に常によく注意することであつたことで、教授等が著述をこの総長に贈呈すれば、彼れは必ずそれを読んで、何とかそれに対する所感を述べ、教授等の学問上の仕事が常に総長によつて尊重され、興味をもつて見守られていることを示したということです。私が自己流に考えてやつていたことに、このような立派なお手本があつたと知つたのは甚だ愉快でした。

総じてこのアメリカ視察は、私には大へん有益でした。往復の航海も含めて三カ月の旅行であつたが、この旅行によつてアメリカというものの、殊にアメリカの大学というものについて或る程度の知識を得たのは、甚だ仕合せでありました。

焼夷弾で重傷を負う

前にも語ったように、西洋留学時代、私はアメリカというものに、ひどく不注意であった。もしこのアメリカ視察をしなかったら、私はその後、大学の長としても多くの見当ちがいをしたことであろうと思う。

それは一九三六年、即ちマアガレット・ミツチェルの『風と共に去りぬ』の出た年のことで、私はアメリカ各地でこの大作の評判をきいて、買って帰って早速それを読み、岩波茂雄その他にその梗概を語ったことを憶い出します。岩波が私の話をきいて、ぜひそれを翻訳出版したいというのを、あんな大きなものを、誰れが翻訳し、誰れが読むものか、といって、私が止め、後になって他から出版されてみるとあのような大成功であったという失敗談は、今まで一二度語ったことがある。

こんなことを段々書いて来ると、話は際限なく長くなる。この身の上話を載せ出したのは元日からであったが、気がついてみると、何時か月末が近づいて来ました。これから先きは駆け足で片づけなければならぬ。

さて、私は前記の通り昭和八年に慶應の塾長に選ばれ、同十二年に再選され、十六年に三選されましたが、再選された年にシナ事変、三選された年に太平洋戦争という次第ですから、結局大学総長として平和をたのしむことはあまり出来なかつた勘定になります。その間に藤原銀次郎氏の寄付により、昭和十四年に藤原工業大学というものが創立され、海軍技術(造兵)中将谷村豊太郎君を学部長として、私はその学長を兼ねましたが、後にそれは合一されて慶應の工学部になりました。

ところで、前にもいったように、私は好んで学生と接触交際する方でありましたが、その学生を、各大学は失わなければならぬことになった。即ち学生が出征することになったのです。殊に昭和十八年十月、学徒総動員ということが決せられて、学校はやがてガラ明きとなり、終戦の年には慶應もほとんど学生がいないので、教育機関としての機能は停止し、ただ一種の研究所として存続するという有様になりました。そうしている中、五月二十五日の空襲で、三田の慶應は大半焼け、私は慶應裏の三田綱町の自宅で、焼夷爆弾のため重傷を負い、慶應病院にかつぎ込まれて、終戦もそこで迎え、十二月まで寝ているという始末になりました。

戦争に至るまでの時局の推移については、無論私として無限の不平があり、憂慮もありましたが、一たび開戦の後には、思い定めて、愚痴はいわず、ヤミもせず、終始愛国的に行動したつもりです。アメリカに勝てると思わなかつたけれども、少しでも有利な条件で講和したいものと思ひ、殊に戦勢が不利になってからは、私は私なりに力を入れて同胞国民の士気を鼓舞することに力めたつもりで、従って時には荒らっぽい言葉を使ったことも憶えています。

それ故、敗戦後バアジぐらいされるのは当り前であるし、次第によっては、もつとヒドイ目に遭つても致し方ない、と思つていましたところ、たびたびの調べに、何ごとも包みかくさず有りのままを述べたのに拘らず、遂にバアジにさえ引つかからなかつたのは、幸運という外はありません。私の目から見てさえ、私よりも遙かに無害(米軍にとって)な多くの人々が続々バアジされたのは公平を失すると思ひ、従つてバアジ解除のための陳情については、私は友人からの依頼には、どれもこれもみな応じたばかりでなく、時には頼まれもしないのにこちらから押し売りして人のために陳情文を書いたことなどもありました。

私の塾長任期は昭和二十年十一月で満了であったが、終戦時の混乱で少し延び、二十二年の一月に至って離任しました。ところが、私の負傷引籠中とはいいなながら、そのやめ方が甚だ不手際であった。というのは、慶應の評議員会は更に私を四選しようとする。塾内の教授たちがそれに反対する、という事態を現出してしまったからです。反対する人々の意見は、当省会つて、きいても見ましたが、今にして思えば、敗戦国で、占領下だというのに、私が戦争中「愛国的」に行動したことはまぎれもない事実であるから、そのような大学総長は不適格だ、という考えは、当時としては普通といえるでしょう。更に戦争中は私も気が立っていましたから、教授たちに、随分手きびしいことを言ったり、したりしたでしょう。それもいけない。更に何よりも、敗戦再建というときに、塾長の私が重傷後の半病人で、自由に歩くことも出来ない有様では心細い、といえば、それは随分同情すべきことであろう。という次第で、当時人々に心配をかけてしまったのは、汗顔の次第です。

私が塾長をやめて潮田江次君がこれに代り、潮田に代って奥井復太郎、更に高村象平君が奥井君に代わって現在に及んでいます。その慶應義塾は、奥井塾長のとき、昭和三十三年十一月八日に、創立百年記念式を行うことになっていたが、先だつこと数週間の頃、塾の評議員会議長で、記念事業推進等の上で、同窓が最も頼りにしていた加藤武男氏が病気になったので（間もなく全快したが）、私が代ってそれに選ばれ、その資格で、天皇陛下御親臨の式典にも列席してそのまま現在に及んでいます。

塾長をやめた私は、最も自然に文筆者 (writer) になりました。

一体世の中に変革のあるときは本の読まれるときであり、敗戦後もまたそうであった。それで、戦前に私の書いた『マルクス死後五十年』とか『初学経済原論』とかいうようなものを改版して出すと、著者当人の驚くほど需要される。これは中々面白い、と思っているところへ、『文藝春秋』（當時は発売部数六、七万の雑誌であった）に連載した「読書雑記」などがチョット批評家にほめられたりしたものですから、気が強くなって、西洋人に仕事を問われたりすると、何時か躓跨なく writer と答えるようになりました。

一体私は自分の境遇に甘んずる性質なのか、慶應の塾長をしている間、仕事が苦しいとか大儀とか、思ったことは一度もない。人に向ってコボしたことは無論ない。ないが、さて今塾長をやめ、組織をはなれて、単独独立の人間となって見ると、その自由の意識というものが実に何ともいえないということを知りました。漱石が大学をやめて朝日へ入社したときのことを書いた文の中に、空気が一度にドツと肺の底まで入ったような気がした、というような言葉があったと記憶するが、私は実際にそれを味わった。但しそれは、私が長く組織の中で働いた経験を持ったからで、始めから文筆ばかりやって来た人にはこの味わいは分らないかも知れません。

また、私は自由な文筆人となってから新しい友人を得ることが出来た。志賀（直哉）、武者小路（實篤）、長與（善郎）というような作家、梅原（龍三郎）、安井（曾太郎）のような画家とも、もし私が学長商売ばかりをつづけていたら、遂に知り会う機会を得なかつたかと思われる。

交友の話の序でに書くと、たびたびいう通り、私は慶應内のことしか知らないような経歴のものであるが、それでも、十年以上も塾長をしていると、やはり何時か狭い学界以外の人々にも交友を持つようになった。その一人は、西園寺公の秘書であり、『原田日記』の著者である原田熊雄君でした。何時原田と初めて知り合ったかよく憶えてないが、およそ遠慮ということをしなかった原田のことであるから、私の方でも、何時までも丁寧な言葉はつかっていられない。その原田が或る時、私にお互いによく池田（成彬）さんの家のメシを食うから、一度池田さんを招待しようじゃないか、という。私も全然同感で、すぐ賛成した。相客は、というから、君に一任するといったら、数人の人に案内してくれた。

場所は大磯高麗山の原田邸、時は昭和十七年の早春、まだ太平洋戦争緒戦の戦果に、人々の心の明るい頃のことであった。料理は箱根富士屋ホテルのシェフ（料理長のこと）を呼び寄せたとかいうことで、池田氏の好む洋食を、日本座敷でたべた。その原田の案内で集まった主客は吉田茂氏、有田八郎氏その他合せて十人ばかり、その外に近衛文麿、米内光政両氏も参加するはずであったが、差支えが出来て来られなくなった。

原田は食前の挨拶の中に、チョットそのことをいった。「池田さん、そういう訳で一流は来られませんが、今日は二流の相客で辛抱して下さい。これは前菜（オールドオヴル）です。この次ぎはホントの料理を出します」といった。「二流」の相客たちは哄笑した。吉田茂氏と私はこれが初対面であった。同氏もその夜の「二流」の客の一人だったのである。

宴が散じて、私は池田氏と、二人の護衛とともに、山沿いの小道を七八町大磯駅まで歩いた。早春の宵の海辺の空気は清く、戦況は兎も角もさしあたり明るく、原田も池田氏もすでに亡き今日から回想して、それは楽しい一タであったと懐い起こされる小集であった。

これでいよいよ履歴書の紙が尽きました。最後に一寸昨今の日常を記せば、今私は麻布広尾町の有栖川公園の傍らの小路の奥に住んでおりますが、東京に七十年も住んでいると、友人知人も多くなり、通信と雑用はふえるばかりです。

私は若い頃に呼吸器を患い、終戦の年の空襲に負傷した以外は健康で、何が一番のたのしみかといわれれば、やはり読書ですが、その読書の時間がだんだん乏しくなっていくのは奈何とも出来ません。家庭では、老妻は幸いに健康、一男二女の、その男子は既記の通り、海戦で戦死、二人の娘はそれぞれ家を成し、少し古風かも知れませんが、次女の夫に私の姓を嗣がせることにしました。先年、長女の娘が三歳で心臓を病んで死んだときは私もだいぶ愚痴ポクなり、だいぶヤキが廻ったなど人には見えたらしいが、その外は先ず元気な老人のつもりです。

この履歴書は、長女の舅、秋山孝之輔君（糖業協会理事長・元専売公社総裁）のすすめに従って書き始めたもので、十四回ぐらいというつもりで出発したが、こんなに話が長くなったのはやはり年のせいでしょう。

どうも御退屈でした。

『山嵐は馬鹿に大きな声を出して、芸者、芸者と呼んで、おれが剣舞けんぶをやるから、三味線を弾けと号令を下した。芸者はあまり乱暴な声なので、あつげに取られて返事もしない。山嵐は委細構わず、ステッキを持って来て、踏破ふみやぶ千山万岳烟せんぱんがくのけむりと真中まんなかへ出て独りで隠かくし芸を演じている。ところへ野のだがすでに紀伊きいの国を済まして、かっぱれを済まして、棚たなの達磨だるまさんを済して丸裸まるはだかの越中えつちゅう禪ぜん一つになって、棕櫚しゅうろ箒ほうきを小脇こわきに抱かい込んで、日清談判破裂はれつして……と座敷中練りあるき出した。まるで気違きちがいだ。』

(http://www.aozora.gr.jp/cards/000148/files/752_14964.html)